

釧根地域将来像検討委員会 第1回委員会議事録

日 時:平成 18年 2月 22日(水) 15:00~17:00

場 所:釧路プリンスホテル 3階北斗の間

<次第>

1.開 会

2.主催者挨拶

釧路開発建設部長

3.委員・アドバイザー紹介

4.議 事

- (1)委員会の設置趣旨について
- (2)委員会運営要領(案)について
- (3)資料説明
- (4)討議
- (5)その他

5.閉 会

<配布資料>

資 料 1:委員会の設置趣旨について

資 料 2:釧根地域将来像検討委員会運営要領(案)

資 料 3:地域の社会、経済状況等の現状及び将来予測について(別紙あり)

資 料 4:釧根地域将来像検討委員会の開催スケジュール

参考資料1:第6期北海道総合開発計画の概要について

参考資料2:地域の関連する計画等について

参考資料3:地域の社会、経済状況等の現状(データ)について

釧路開発建設部次長 それでは定刻になりましたので、釧路地域将来像検討委員会第1回検討委員会を開催させていただきたいと思っております。私は釧路開発建設部次長をしております参鍋です。本日司会を務めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

定刻になりましたけれども、三膳委員がまだいらしていませんけれども、開催させていただきたいと思っております。来られました。少々お待ちください。

それではお手元の議事次第に従いまして、主催者であります釧路開発建設部部長松浦よりご挨拶を致します。

釧路開発建設部部長 釧路開発建設部部長の松浦と申します。よろしくお願いいたします。委員ならびにアドバイザーの皆さま方には本日はお忙しいところ、また天候の悪いところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。また委員の先生方には委員就任を快く引き受けていただきまして重ねてお礼を申し上げたいと思っております。

委員会でございますけれども、昨年の秋でございますが、北海道の長期的な開発の方向を定めております、第6期の北海道総合開発計画の点検作業が開始されております。また現在その新しい計画策定作業の方が国土審議会の北海道開発分科会を中心に進めておられるところでございます。

本来地域の将来像でございますけれども、地域が議論をして自ら決めていくということだと思っておりますけれども、この総合開発計画から地域の将来像に大きく影響するものでございまして、道東地域として、この計画策定作業に情報発信をしていきたいということから、この委員会を設置することにいたしました。

地域のとりまく状況を見てみますと、まず我が国の人口減少時代が始まったということ、それからアジア諸国との交流が急速に増加しているということと、さらには安全・安心意識が非常に高まってきているということ、それから地球環境問題の深刻化だとか、ますます厳しさを増す国や地方の財政制約など、社会経済情勢というのは、非常に大きく変化しております。

地域の将来像の検討にあたっては、これらの変化に対応したものであることが必要だと思っております。それから、またこれからは金太郎飴的な地域づくりではなくて、地域の資源だとか、地域の特性をフルに活かした個性のある自立できる地域づくりというのも、求められているのではないのかなと思っております。それから地域づくりにあたっては、地域のことは地域で考えるということで、将来像について地域の方々が共通認識を持つということが重要ではないかなというふうに思います。

この委員会でございますけれども、この地域の学識経験者の方々、それから市町村の方々をメンバーと致しております。また地域の方々も傍聴していただくようにということで、公開しております。地域の皆さんと一緒に考えていきたいなというふうに思っております。本委員会ではこのような幅広い視点から皆さんの忌憚のないご意見を期待しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

釧路開発建設部次長 ありがとうございました。それでは続きまして、資料の確認をさせていただきます。議事次第を除きまして、お手元の資料の右上に資料番号を四角に囲っておりますので、確認をしていただきたいと思っております。

まず資料1「委員会の設置趣旨について」、資料2「釧路地域将来像検討委員会運営要領

(案)、資料3「地域の社会、経済状況等の現状及び将来予測について」別紙、A3で織り込んでおります。資料4「釧根地域将来像検討委員会の開催スケジュール」縦長のペーパーでございます。

これ以降、参考資料になりますが、参考資料1「第6期北海道総合開発計画の概要について」、参考資料2「地域の関連する計画等について」、参考資料3「地域の社会、経済状況等の現状について」各種データという構成になってございます。

その他に、番号は書いておりませんが、本日は田村委員が欠席ということがございまして、事務局の方でまとめさせていただいたメモを資料としてありますけれども、皆さんでございますでしょうか。無いようであれば後で言うだけだと思います。

それでは資料の確認をさせていただきましたので、これから委員の方々とアドバイザーの皆さんのご紹介をさせていただきたいというふうに思います。委員の方から席順というかたちで申し訳ないのですが、ご紹介させていただきたいと思います。時間の関係上、所属等のご紹介等は控えさせていただきたいと思います。

まず石橋委員でございます。続きまして大島委員でございます。続きまして栗林委員でございます。近藤委員でございます。小磯委員でございます。三膳委員でございます。辻中委員でございます。出村委員でございます。行木委員でございます。宮田委員でございます。なお宮田委員につきましては、4時30分までということでございますが、それまでに退席されるということです。

続きまして順番ですけれども、その順番でございますけれども、アドバイザーをご紹介させていただきたいと思います。

釧路市の本山様でございます。釧路町の佐々木様でございます。厚岸町の福田様でございます。標茶町の佐藤様でございます。弟子屈町の江口様でございます。続きまして北海道運輸局釧路運輸支局の村上様でございます。釧路開発建設部部長の松浦でございます。続きまして釧路支庁の駒込様でございます。根室支庁の和田様でございます。鶴居村の目黒様でございます。白糠町の下重様でございます。根室市の島谷様でございます。中標津町の西村様でございます。羅臼町の久保田様でございます。以上ご紹介させていただきました。

続きまして本委員会の委員長の選任でございますけれども、これにつきましてはあらかじめ小磯委員に委員長をお願いしておりますので、皆さんよろしいでしょうか。(賛成の声有り) 皆さんよろしいということですので、これ以降の議事につきましては小磯委員長にお願いしたいと思います。

小磯委員長 釧路公立大学地域経済研究センターの小磯でございます。今回のこの釧根地域将来像検討委員会委員長ということで大役ではございますが、務めさせていただきたいと思っておりますのよろしくお願いたします。最初に挨拶ということではないのですが、一言この検討委員会の第1回ということでございますので、お話をさせていただきたいと思っております。

ちょうど平成18年度、19年度というのは、北海道における新しい地域指針、長期の計画、ビジョンというものが一斉に議論され、新しいものがつくりあげられるという、そういうちょうど時期になっております。国においては先ほど釧路開発建設部長からご挨拶ありましたように、第6期の北海道総合開発計画に引き続く、新しい総合計画の議論も始まって

おります。

私自身も国土審議会のメンバーということで、その議論に参画をしておりますが、ある意味で国と地方の関係が色々なかたちで三位一体改革、地方分権という、あるいは道州制という流れの中で、計画作業もそれとは無縁ではないという、色々な意味で新しい難しい課題を背負った中での作業になっております。

同じく、北海道庁の方におきましても新しい総合計画の策定作業というのが、先般の総合開発委員会で始められたばかりです。私はそのメンバーでもございまして、そこでも従来は国の計画とかなり近接した計画づくり、戦後の北海道の総合開発計画を振り返ってみますと、第1期から第3期までは国も道庁も一体となった計画づくりだった訳です。

第4期から、北海道は独自の計画づくりを始められ、ただ独自とはいってもそれを国の計画に意見として反映されながら計画づくりをした訳です。

今回の計画からは独自の北海道の行政条例に基づいた非常に自主性の高い計画づくりを進めている中で、新しい国の計画はどうつくるべきか、特に地方からの意見の組み入れはどうしたらいいのかということで、先般国土審議会の議論の中でも非常に大きなテーマとなっております。

今回釧路根室地域で釧路開発建設部という組織が自らこういうかたちで、新しい総合計画に向けてのその意見、考え方というものを、こういう検討委員会の場で議論して、それを提起していこうという、私はかなり象徴的な意味合いがあるのではないかなと思います。

少なくとも、戦後の総合開発計画議論の中で、開発建設部からこういう検討委員会という場で、計画に向けての検討を進めていくという流れはなかったと思います。そういう意味では初めての取り組みではないかなと思います。

先般国土審議会の部会の中でも、そういう意味づけということで、私からもメンバーの皆さんに紹介をさせていただきました。それだけ取り組みの意義は重いという部分と、また一地域だけでどこまでの議論ができるのかということ、その難しさはあると思います。

その辺はこのメンバーの皆さま、オブザーバーの皆さま方に、ご協力を得ながら何とか実りあるものにしていければと、私も微力ながらお手伝いをさせていただければと思っておりますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

それでは早速議事に入っていきたいと思います。最初に事務局の方から、本委員会の設置趣旨、委員会運営要領、釧路地域の現状及び将来予測、これらについてのご説明をお願いいたします。

事務局（釧路開建） 釧路開発建設部地域振興対策室の稲垣と申します。よろしくお願
いいたします。私の方から資料1と資料2につきまして、説明させていただきます。

資料1をご覧ください。委員会の設置主旨でございます。読み上げるかたちをとりましてご説明させていただきます。

委員会の設置主旨について、「わが国は、かつてない継続的な人口減少と急速な少子高齢化の時代に突入し、その一方で、アジア諸国の経済的な台頭はめざましく、東アジアとの交流も急速に増加しています。さらには、地球環境問題の深刻化、国・地方を通じた財政制約も厳しさを増しています。また、昨年11月には北海道の長期的な開発の方向と実現のための方策を定めている「第6期北海道総合開発計画」の点検・見直し作業が開始され、新たな「北海道総合開発計画」の策定に向けた作業も行われています。」以上が設置の背景

でございます。

「これら最近の社会経済情勢の変化に対応しつつ、釧路・根室地域の特性を活かした将来像とそれを実現するための社会資本整備のあり方について検討するとともに、新たな「北海道総合開発計画」の策定作業に地域として情報発信していくため「釧根地域将来像検討委員会」を設置するものでございます。」以上が委員会の設置主旨でございます。

続きまして資料2をご覧ください。釧根地域将来像検討委員会運営要領（案）でございます。「第1条本委員会の名称を、釧根地域将来像検討委員会とする。」第2条委員会の目的については、設置主旨で申し上げたとおりでございます。

第3条委員会の構成は別紙のとおりとありますが、先ほどご紹介いたしましたのが、小磯委員長をはじめ11名の委員の皆さま方と、行政機関から釧路運輸支局、釧路支庁、根室支庁、管内13市町村の皆さまをアドバイザーとして構成致します。

第4条委員会審議の運営は委員長が行います。第5条委員会の事務局は、国土交通省北海道開発局釧路開発建設部に置くことに致します。第6条委員会の設置は、本調査検討の完了までと致します。第7条といたしまして、その他でこの要領に定めるもののほか、委員会の運営に関しまして必要な事項は、委員会に諮って定めることと致します。以上でございますがご了解いただきましたら、この要領は本日平成18年2月22日から施行することと致したいと思います。資料1につきましては以上でございます。

小磯委員長 はい、どうもありがとうございました。この点に関してはどうでしょうか。よろしいでしょうか。はい。

それでは時間も限られておりますので、早速資料3地域の現状についての説明をお願いしたいと思います。

事務局（未来総研） 未来総研の北嶋と申します。資料3につきましてご説明させていただきます。座りながらご説明させていただきます。

お手元にお配りさせていただきましたA4横パワーポイントスライドのシートがあるかと思えます。スクリーン上で写しながら、こちらの方簡潔にご説明させていただければというふうに考えております。なおお時間の都合もありますので、ポイントのみかいつまんでご説明させていただきます。

それでは人口でございます。2000年の人口分布を見ますと釧路市、根室市、中標津町、釧路町などに集中しておりますけれども、全体的には分散的に集落が点在する傾向にございます。なおこの赤い点が1条丁あたりに100人以上、青い点が1条丁あたりに100人未満10人以上という単位でございます。

次に我々の方で独自に2030年の人口を推計した場合に、どうなるのかということでございますけれども、こちらにつきましては、青い色が深くなればなるほど人口減少が著しいということで、中標津町で微増となる他は2030年の団塊はどの市町村ものきなみ人口の減少が予想されるという結果となっております。

次に市町村別の具体的な数字を見てまいります。シートの4番目でございますが、数字につきましてはご覧いただいたとおりでございますが、2000年の国勢調査をベースとした人口が地域の中で約36万人に対して、2030年の段階では我々の推計によりますと約23万人と、36%のマイナスというようなかたちで推計、整理をさせていただいております。

次に5枚目でございます。この地域の人口の推移がどうなのかということで、2000年を100とした場合の推移を北海道、全国、及びこの地域ということで、整理をさせていただいておりますが、2000年を100とした場合に、この地域は63.9、全国が92.8、北海道が81.7ということで、これらと比較した場合に、人口減少はやや顕著であるということがいえようかと思えます。

次に6ページでございます。6ページにつきましては釧根地域の年齢別の人口構成、高齢化率を線グラフで表したものでございます。全人口に占める65歳以上の方の割合でございますが、これが2030年にはこの地域は37.9%ということで、北海道の35%を上回って、なおかつ全国との対比でまいりますと、8.3%程度上回るものと見込まれております。

次に視点をかえまして地方財政でございます。地方財政につきましては北海道市町村会等が作成しております北海道行財政運営シミュレーション、この釧路、根室支庁管内の市町村の財政シミュレーションを行った場合に、これは現実ですけれども、2000年の歳入額は2,494億円に対して、2030年には1,515億円程度と現在の約6割程度の規模となるというふうに推計されています。なお歳入と歳出の差額を市町村別に見てまいりますと、2030年ではこの歳入と歳出の差額がマイナスになるというような予測をされる市町村が、9市町村に上っております。

次に経済について見てまいります。生産額の現状でございますが、釧路、根室地域の生産額は約2兆6千億円で、北海道の7.5%を占めております。この7.5%は人口構成比が6.4%でございますので、この値は上回っております。

次に生産構造について見てまいります。スライドの9ページ目でございます。この地域は全道の他地域に比べて、製造業や工業の割合が高く、第3次産業の割合が低い状況になっております。特に製造業は25.8%ということで、後ほど詳しくご説明させていただきますが、特徴のある構成になっているというふうに結論付けることができます。

次に9ページでございます。産業別特化係数というのは、北海道での平均的な生産量であれば、1.0だけれども、多い場合は1を上回るということで、1を上回るということは比較的地域でのそれら製品の産業が盛んであるということがいえようかと思えます。この特化係数を見た場合には、この地域は漁業が3.77、工業が3.75、製造業のうちと畜・肉・酪農品、主に牛乳になるかと思えますが、こちらが3.11、水産食料品が3.67、パルプ・紙が3.22となっております。先ほど製造業が盛んであるというふうにあげましたけれども、水産食料品であるとか、パルプであるとか、こういったものの生産が、他の地域に比べても非常に盛んであると、特徴的であるということがいえようかと思えます。

次に11ページ目でございます。域際収支でございますけれども、これは北海道6つのブロックに分けた時に、他の地域とのやりとりが黒字であるか赤字であるかというものを差し示したものでございますが、釧路、根室地域は道内の域際収支、道内のその他の地域に対しては1,889億円の赤字、主に道央圏ということになり赤字になりますが、道外に対しては632億円の黒字ということで、このことはやはり漁業であるとか、水産業が寄与しているといえようかと思えます。

続きまして12ページでございます。12ページは交易状況を整理させていただいたものでございます。ちょっと見づらい表でございますが、釧路、根室地域は道外、あるいは海外との交易額が約1兆3千億円ということで、道央であるとか、道北であるとか、これら人口の多い地域に次ぐ3番目の規模となっております。概観いたしますと道内の他地域との

つながりよりは比較的、道外、海外とのつながりの方が、経済的には強い地域であるということがいえようかと思えます。

続きましてスライドの13ページでございます。交易状況の でございますが、海外に輸出、他の地域に移出しているものの釧路港の状況について見てまいりますと、軽工業品、あるいは鉄くずなどが多くなっておりますが、農水産品であるとか、鉱産品であるとか、林産品であるとか、こういうものが非常に大きなウェイトを占めております。特に最近ではホクレン丸といいますか、RORO船の就航によって紙であるとか、牛乳などが、関東などの本州方面にかなり多くの量が輸送されている実績がございます。

続きまして14ページ目でございます。生産誘発構造というのは地元で消費されたもの、あるいはその他の地域、道外で消費されたものなどが、この地域の生産に影響を与えているか、どれだけ生産量を増やしているかというような割合がございますが、これにつきましては、これもご覧いただいたとおり、道外の需要が38.6%ということで、道内他地域に比べると、どう外需用に影響を受けやすい構造であるという面、この地元の消費というのが35.0%と、道内の他地域に比べると地元の消費というのが、あまり大きな影響、ウェイトを占めてはいないと結論付けられるかと思えます。

次に15ページ目でございます。圏域別の自給率を見てまいりますと、道央が70%に対して、この地域は62.5%ということで、他地域に比べますと非常に低い結果となっております。これらにつきましては16ページの説明が終わった段階で、小磯先生に補足をいただければと思います。

続きまして16ページ目でございます。圏域内自給率向上による経済波及効果ということで、例えば今ご説明させていただいたように、地元の消費があまり寄与していないけれども、1%だとか、3%だとか、5%だとか増えた場合に、地元にどのような効果を与えるのかというような部分の推計でございます。これらにつきましては15ページも含めて、小磯先生から補足をいただければと思います。

小磯委員長 15ページ、16ページにつきましてはこれからのこの地域の将来を考えていく場合、この地域の経済構造、産業構造はどう見ていくべきかということで、その中では自給率、この地域で生産されたものが、この地域の方達にとって、どれだけ使われているのか。あるいはこの地域の方達の消費が、この地域の中でどれだけ行われているのか、お金が外にもれているのかどうか、実はそういう観点で、この地域の将来発展を見ていくことが重要ではないかということで、これは一昨年から北海道庁の産消協働という政策の取り組みを進めておりまして、私自身も一緒にお手伝いしながら、データの分析を私の方でやってきたというような経過があるものですから、今回釧路、根室地域についての資料を示したという背景でございます。

15ページの資料で、釧路、根室地域の自給率というのが、北海道の6ブロックの中で一番低いというのをどうみるかということが、私は大変重要なポイントだと思います。一つは先ほどご説明ありましたように、北海道の中でも釧路、根室地域には大抵的な貿易力、交易力が大変強いと、農業、水産業、製造業関係で、外からしっかり稼いでいるとそういう構造が一つあるということで、域際収支が黒字になっている。一方でこれだけ稼いでいるのだけれども、稼いだお金というのは、実は地域の中でしっかりと消費され、再投資されているかということとその割合が弱いという、外で稼ぐ力はある地域だけれども、自分たち

の地域に対して、循環的、還元的に投資していくというそういう産業構造を強くしていけば、もっともっと強い地域になるという意味合いが込められています。

したがって 16 ページにありますように、今ある釧路、根室地域における自給されている割合というものを少しでも高めていけば、1%高めていけば外からこの地域に入ってくるお金がプラスマイナスゼロと、全く変化がなかったとしても、自分たちの地域の中で、循環する割合をちょっと高めるだけで、生産額G R Pベースで 121 億円、5%高くなれば 516 億円、雇用人数で見れば 4 千人を上回る雇用を、自分たちの地域の中に生み出すことができる。

外から公共事業だとかを持ってこなくても、外にもれている割合を、地域の中でしっかり循環させることができるわけです。そういう地域経済構造をつくることによって、これからの地域の発展方策としての道筋として、あり得るのだということというふうに読んでいただければと思います。以上です。

事務局（未来総研） ありがとうございます。引き続きましてご説明に戻らせていただきます。スライド 17 ページでございます。地域経済の課題ということで、今まで経済の部門についてご説明させていただいたことを、かいつまんで整理させていただきます。

「特定の産業、業種に強みを有する」と今までご説明させていただいたとおり、漁業や酪農品水産食料品、パルプ・紙などに強みを有しているけれども、その他製造業やサービス業などとの格差は大きいのではないだろうか。こういったものをさらに伸ばすのか、あるいは全体的な底上げを図るのか、といった視点が一つ必要になるのではないかというふうに整理させていただいております。

次に「道外市場との結びつきが強く、自給率も決して高くはない」とこちらにつきましては小磯先生から只今ご説明をいただいたことで十分かと思います。

3 番目「人口減少への対応」ということで、この地域においても当然人口減少が現実視され、またその傾向も他地域に比べるとやや顕著になるという懸念もあるという部分で、今後の需要の維持である、拡大であるとか、あるいは拡大や生産性の向上といった、生産者が減っていくわけですから、そういった対応が要求されてくるものと整理させていただいております。

次に 18 ページ目でございます。農業、水産業とういうことで、1 次産業について主なものをかいつまんで、整理をさせていただいております。このグラフは全道に占めるこの地域の割合というふうにご覧ください。この地域の特徴と致しましては、農家人口こそ全道の約 5.3%であるにも関わらず、例えば牛乳の生産量であると 34.6%、水産の生産高でありますと 32.6%というふうに大きな割合を占めていることからわかりますように、比較的大規模化が進んでいると、特徴的な地域であるといえようかと思います。

次に 19 ページでございます。この地域の農家戸数と農家人口を見たものでございます。青と赤の北海道の地図が、現時点での集落位置図でございます。これを見ていただければわかるとおり、決してこの地域にたくさんの農家が集まっているという訳ではないというようなことが、簡単ではございますが見てとれるかと思えます。半面右側の図、3 次メッシュによる農家人口予測ということでございますけれども、恐らくこの地域というのは農家人口が今後、さらに減少していくという可能性があるのではないかということが、見てとれようかと思います。

続きましてスライドの 20 ページ目に移らせていただきます。農業・水産業の課題ということで簡単に整理をさせていただきますと、一つには「従事者数の減少や高齢化などへの対応」が今後必要になってくるであろうと、それから既に大規模化など進んでおりますが、より一層の効率化を図るために何かをしなければならない。あるいは高付加価値化への対応が必要になってくるのではないかとというようなかたちで、整理をさせていただいております。

次に 21 ページ物流に移らせていただきます。21 ページは釧路港の例でございますが、釧路港に依存している市町村の分布でございます。依存というのは利用されているということでございますが、赤ければ赤いほど釧路港に依存、利用されていると思います。ご覧いただければわかるとおり、周辺を中心に 57 市町村が釧路港を利活用されているということで、物流を考える際にはやはり、広範囲な交通アクセスを考慮していく必要があるのではないかと整理できるかと思っております。

次に 22 ページで、牛乳の物流状況ということで、牛乳について記載をさせていただいております。この地域の生産量は日本一でございますが、道外向け約 33 万 t のうち、約 20 万 t 余りが釧路港より R O R O 船で関東向けに出荷されております。

次に特徴的な例と致しまして、スケソウダラの物流状況ということで、こちら釧路市では、全国の約 1/3 に相当するスケソウダラを水揚げされておりますが、苫小牧港及び小樽港へのアクセス改善により、鮮度の高いスケソウダラの輸出、主に韓国を中心とした輸出が可能となってその量が近年増加しております。

このような事例をみながら、物流における課題をかいつまんで整理をさせていただきますと、24 ページでございます。「需要に対応した多様な輸送ルートの確保」が重要になってくるであろうということで、先ほど申し上げたとおり、牛乳であるとかスケソウダラなどの事例からも明らかのように、製品によって釧路港を使ったり他の港を使ったり、輸送時間によって陸送したりと、色々な選択肢がある訳でございますが、こうしたニーズに対応した多様な輸送ルートの確保といいますが、提供が今後重要になってくるであろうと。

次に「地域特性に合った輸送形態の検討」ということで、産業、製品について、あらたな輸送形態について、牛乳の R O R O 船、ホクレン丸といったようなかたちのものも考えていかなければならないのではないかとこのかたちで、整理をさせていただいております。

次に観光に移らせていただきます。25 ページが観光資源といわれるものの分布状況というものでございますが、この地域は相対的に観光資源が非常に多いといわれていますけれども、これを他の地域と観光資源ごとの入込数で見ると、手前者どもの整理でございますが、1 資源あたりの入込客数はおおよそ約 30 万人で、これは道南の 83 万人、オホーツクが 40 万人、十勝でも 41 万人とこういったものと比べても、資源数との対比で見ただけでは少ないのではないかとこのかたちで、この地域ではいえるかと思っております。

次に 26 ページ自然遺産、自然公園などでございますが、知床をはじめとして、各種の自然公園やラムサール条約登録湿地などがあり、道内はおろか全国的に見ても非常に大きなウェイトを占めている地域であるといえようかと思っております。

次に 27 ページ入込客数の動向でございます。入込客数の動向につきましてはご覧いただいたとおりでございますが、年間約 950 万人の入込で、道外客の比率は 40.7% で、また宿泊客比率も 22.9% で、これらの値は他の地域と比べて高い状況にあります。

次に 28 ページ海外観光客の動向でございます。台湾などアジアからの来訪者が近年非常に増えておりますが、宿泊客数が最も多いのは阿寒町の約 5 万 8 千人で、地域全体のかなりのウェイトを占めております。

次に観光ルートの設定状況でございます。大手代理店のパンフレットから設定などをしておりますけれども、東京発の夏冬ではこういうような状況になっておりますが、入り込みの基点となっておりますのが、実数でございますが、新千歳空港発着が 221、釧路空港が 50 という状況でございます。やはり基点はこの地域の観光といえども、新千歳空港発着が中心となっていることと、レンタカーを組み込んだフリープランが、非常に現在は増加傾向にあるとなっております。

次に 30 ページ、31 ページは経済効果についてでございます。後ほどこちらにつきまして小磯先生から補足いただければと思いますが、2000 年の推計値でまいりますと、この地域の観光消費額は 646 億円で、生産波及効果 859 億円、雇用効果 7,700 人と推計されております。

31 ページに移りますが、この水準を他の産業と比べた場合どうなのかといった時に、現時点で既に漁業の 4.9%、農業の 4.6%、こういったものの半分程度のシェアを占めるまでにいたっているということで、地域の重要な産業となりつつあるということが裏付けられるということがいえるかとありますが、30 ページ、31 ページにつきましては恐縮ですが小磯先生から補足いただければと思います。

小磯委員長 今補足しましょうか。

事務局（未来総研） よろしくお願いたします。

小磯委員長 30 ページ、31 ページにつきましては、私、地域経済研究センターの方で、2000 年に調査研究結果ということで発表したデータです。

ここでお示ししているデータ、これをつくった意味といたしましては、観光というものを考えていく上で、観光をみるというデータは入込客、集客というベースでしかみられなかったのですが、地域がこれから観光で発展していく、幅広い意味で外から観光に来た方の地域内消費、それがしっかり地域の産業が受け止めて、具体的な雇用を維持し、創出していくというシナリオを描いて、いくら人が来ているというだけでは、実はその戦略は練れないということで、本当にこの地域における観光消費というものが、どういう産業に結びついているのか。観光産業とは何かとこの機会にちょっと分析してみようということで、実はそういうデータが全くないものですから、そういうデータをつくったという背景があります。

その結果、30 ページの表はこの釧路、根室地域に観光客、外から来た訪問客が消費したその消費のお金がどういう産業に波及しているのか。これが観光産業だというものを少し見てみようということで分析したものです。独自に観光産業を分析するための観光産業分析用の産業連関分析表をつくりまして分析した結果です。

30 ページでお示したかったのは、額というよりもこれほど幅広い産業が観光消費を受け止めている産業なのだという、そういうことでございます。1,500 というかなり細かい実態調査をしたのですが、この地域だとガソリンスタンドとか、コンビニとか一般の定住さ

れている人と変わらない消費形態が随分増えてきている。実際そういう産業の方たちが、自分達が観光産業だという意識がどこまであるかと、そういう意味でこの地域の観光産業の実態をみつめていただくところから始めていこうということを、示したのが 30 ページの図ということです。

例えば漁業関係も、大変観光消費の波及を受けているということですが、漁業に従事している方達はどこまで自分達は観光産業なのかという意識があるのかどうか、その辺はそういう客観的なデータの中で、あらためて認識していただければという思いです。

31 ページは、観光産業というのはこの地域の発展の可能性、産業になりうるかどうか、この見極めをしたいということで、この釧路、根室地域の産業連関表、総生産の中の産業構造を分析した訳です。先ほど消費を受け止めた各産業の合計の付加価値、あわせてみると 2.3% というこういう数字がでた訳です。これは今世界的には観光産業を語る上で、T G D P という G D P というものの中のツーリズムというものの割合を示しながら、議論していこうというそういう流れであります。

残念ながら、我が国の場合は全国でやっているのは、国土交通省で最近出していますけれども、地域別でやっているのは北海道の釧路、根室地域と、沖縄だけです。沖縄を見ますと 7% というこの割合で、したがって今この地域 2.3 位しかないと見た方がよろしいです。問題はこれが 20 年後、30 年後どういう地域の経済構造に、産業構造にしていけるのか、可能性があるのかというのを、議論していくために見ていただきたい訳で、現実に建築土木は 2000 年データですが、現在だと 7% 切る位のシェアだと思います。将来的には今、経済財政諮問会議の考え方では先進国並みにするといいますから、これが 2% とかを切るといふ。これは多分、現実のものでしょう、将来的には、漁業、農業がどこまでこれを維持できるか、なかなか多くの国際環境との課題がある。その中で観光産業が仮に沖縄並みまでいかなくても、今の倍になれば、この地域の基幹産業、場合によっては最大産業の発展可能性がある。可能性があるとしていただければと思います。以上です。

事務局（未来総研） ありがとうございます。引き続きスライドのご説明に戻らせていただきます。32 ページでは観光、環境における課題という部分で整理をさせていただいております。

一つには地域の資源が、観光に十分に活かされていないということ、十分に活用されていないという懸念があるということ。次に域内消費、この地域の中での消費をもっと増やしていく必要があるのではないかとということ。最後に環境と観光との関係ということで、どんどん人が来れば観光的にはいい訳ですけども、半面環境が汚れるような状況に陥る懸念もあるということ、トレードオフの関係といえますか、そういうような視点から見ていった場合に、環境と観光の視点もどう捉えていけばいいのかと、この部分が今後の課題として捉えることができると思います。

次に 33 ページ、医療についてでございますが、やはり主として釧路市が救急医療などの中心になっておるわけでございますが、先ほどご説明させていただいたような、高齢化だとか住居地の分散などに対応するためにはやはり、医療機能の充実と、加えてそういったところへの所要時間の減少といえますか、定時性の確保がより望まれることではないかと思われま。

次に 34 ページに移ります。防災でございます。災害への対処ということでこの地域、地震活動が活発とされていることに加え、近年では中央防災会議では釧路管内で 15m 以上の津波があるなどと公表されております。これらについて防災、減災のための対策強化というものも、あわせて考えていかなければならないであろうということでございます。

次に 35 ページに移らせていただきます。地震等の災害に加えてこの地域は、雪害などによる通行止めも非常に多い。今年も非常に多雪で被害の拡大が懸念されておりますけれども、こういうものについての対処も一つ考えていかなければならないというようなことで整理をさせていただいております。

最後になります。36 ページ、北方領土との関係ということで、この地域の経済交流やビザなし交流における重要な役割を担っている訳ですが、スライドの方ではビザなし交流の実績の推移をお示しさせていただきました。

以上が資料 3、甚だ雑駁でかいつまんだ説明ですが、以上でございます。この資料 3 につきまして、事前に本日欠席になっておられます委員の室蘭工業大学の田村教授にご説明させていただきまして、何点かメモの入れさせていただいておりますが、コメントをいただいておりますので、簡単にご紹介をさせていただきます。

特に重要なポイントとしては、東アジアとの関係を考えていかなければいけないだろうと、例えば日本全体や東京などを物流状況の把握は、あまり意味がないのじゃないかと。東アジア向けの物流、あまり知られていないけれども、増えている状況なのでこういった東アジアとの関係に力点をおくべきだという部分で、そういう視点からまいりますと、釧路港が非常に今後重要な役割を担うことになるので、これらについて釧路港の整備が必要であるという必要性の論議だけではなく、東アジア向けにどういうことが出来るのかといったことの可能性も、実現性もあわせて考慮して、例えば具体的なビジネスプランをたてられるような委員会になればいいというコメントをいただいております。

もう一つ重要な視点としてご指摘いただいておりますのは、集落崩壊への対応でございます。農村集落の崩壊は、北海道だけではなくて、全国的にも今後避けられないテーマであり、一部地域では「自然に戻す」ことなども将来的には必要になってくるであろうと。

ただ、この地域は既に大規模化なども進んでおりますし、「生き残れる」可能性のある数少ない、口頭では全国でも数少ない唯一の地域であると先生おっしゃっていましたが、そういうようなかたちで農村集落が、人口減少下においても持続可能な酪農を中心としたモデルケースを描いて示していくことが、委員会ですればいいというようなお話をされておりました。水産業においても同様でございます。

次にその他で重要だとおっしゃられた点ですけれども、2 つございます。一つは生活圏が持つ比較優位性の整理ということで、これまでの生活圏域は、どちらかといえばインフラを整備する側、行政側で、つくる側の論理で決めていたけれども、これはあまり意味がないのではないかと、生活者の視点が必要になってくるのではないだろうかということで、生活者の実際の行動やニーズ等を踏まえて、今あるものをどう活用していくのかを議論していくべきであるということが一つです。

もう一つは、釧路、根室という地域が帯広などと比較した場合に、優れていればヒトやモノが来るのであろうけれども、優れていなければ来ないことは自明の利だから、この辺をきちんと整理する必要があるのではないかと、というふうにおっしゃっておられました。

次に、重要なポイントの最後になりますが選択と集中という部分で、釧路地域生活圏の

検討で、この地域を将来的に見ていった場合に、中標津も釧路というのは生活圏として残るであろうが、その他地域は非常に、人口的には厳しくなっていくであろうと。他地域ではありますが、2050年には北見でさえ生活圏として、成立しないとする推計もあるというご指摘がございました。こうした中でこれからのこの地域がどうあるべきか、こういった厳しい見通しの中でどうあるべきかということで、口頭では不要なものは切り捨てていく位の覚悟が必要であるというお話でしたけれども、その際は何を残し、何を削るのか選択と集中が必要であるとのコメントをいただきました。

以上田村委員のご発言につきましてかいつまんでご説明させていただきました。その他参考資料1、3につきましては、ご説明は割愛をさせていただきます。後ほどご確認をいただいて、何かありましたら事務局宛にお問い合わせいただければと思います。

引き続き資料3別紙A3の2つ折りにしたペーパーがございます。こちらにつきまして小磯委員長からご説明お願いいたします。

小磯委員長 ご説明どうもありがとうございました。引き続き資料3別紙この説明は私からさせていただきたいと思います。なぜこの資料をつくったかといいますと、実は経済産業省が人口減少化における地域経営のあり方ということで、2年ほど地域経済研究会という研究会で調査研究を進めておりました。

私自身もその取り組みにお手伝いをしているということで、この委員会の議論というのはこの地域の将来を考えていくという中で、できれば客観的、定量的な将来予測というもの、少しきめ細かくしていく必要があるのではないかとということで、機械的シミュレーションではあるのですけれども、この地域の2030年の地域経済というものを、人口それから産業活動の全体的な規模、全国の他の地域と比較してどういふかたちになるのだろうかということで、少し表で示したものです。

見ていただきますと、人口というのがあります。ちょっとみづらいのですが、上段の区分というのは東京の都市圏、政令指定都市の都市圏、県庁所在都市の都市圏、10万人以上の都市圏、10万人未満という、こういう経済産業省の枠組みの区分がある訳です。そこにこの地域を入れ込んでつくったということです。表だというふうに見ていただければと思います。

2030年で日本の中で人口がプラスになるのは、東京都市圏だけで、政令指定都市でも都市圏というのは人口減になると、しかも県庁所在地の都市圏で10万人以上、10万人以下ということで、大変減少率というのがどんどん高まっていくという流れがあります。

さっき未来総合研究所の方で出された資料で、人口将来動向推計、若干数字は違います。このデータは大体人口問題研の推計という全国推計でよく使われている、未来総研の方は少し厳しめに、北海道の特殊事情を勘案して推計されたのですけれども、それにしてもこれだけの厳しい数字になっているということです。

次に2番目の欄は域内総生産、それぞれの地域に経済の規模というのは、人口が減っていくことによってどうなるのかということを見ると、東京都市圏とか、政令指定都市ここでは人口は、政令指定都市では若干の減があったとしても、経済の生産規模は上昇していくということで、それ以下の地域だと減少していくという状況があります。

人口当たりの総生産、就業当たりの総生産を見ていくと、1人当たりの生産、これは労働生産性の向上であるとか、それはプラスに転じていくということで、ただ大都市圏、都

市圏、地方圏では下がるということです。下の方では釧路支庁、根室支庁の農山村部も含めたものをだしていただきますけれども、数字としては大変厳しい数字がでてきているということです。

もう一点、ここで右側の二つの欄です。域内市場産業と域外市場産業という区分で産業分類をしているということです。従来、1次、2次、3次とかの産業分類で地域の産業を見ていたのですが、さっき私は自給率とか、そういう点で少し問題提起しましたように、これからの地域産業というのはどうやって地域の経済発展というのを自分達の力で、戦略的に図っていくかという場合の見方としては、やはり外できっちり稼ぐ産業と、地域の中でしっかり域内循環産業を育てていく産業という部分で、地域戦略を組み立てていく必要があるのではないかと、この表の下にありますように域外市場産業と、域内市場産業というこういう区分で見た訳です。

ここで見ていただきたいのは、人口減少ということになると、域内の市場産業、地域の中で床屋さんとか、サービス産業と、お互いにサービスを提供しあう中で、循環する産業というのは人口が減っていけば減っていく訳です。それに比べて域外で稼いでいく産業というのは、実は人口減少という影響にあまり影響を受けないという傾向が全国的にできています。

例えば、一番上の右、東京都市圏、ここで見ていくと域外市場産業の伸びに比べれば、域内市場産業の伸びが低いということは、人口減少だから当然です。政令指定都市の都市圏もそうです。域外で稼ぐのに比べれば人口減少になるので、域内の市場産業が減っていく。これが実は全国的な県庁所在地の都市圏でもそういう傾向がみられます。

例えば釧路の都市圏、根室の都市圏ここで見ていくと、域外で稼ぐというその産業の部分の減少率が高いという、これだけ人口減少があるにも関わらず、基盤となる外で稼ぐ部分での減り方が大きいという。これは別段で掲げた都市圏、釧路支庁、根室支庁でも共通の傾向としてうかがえます。

こういう見方で地域の将来産業構造の問題点をにらみながら、これからの地域の産業戦略をきちんと議論し、そのため弱いところをどうカバーしていくのか、盛り上げるところをどう盛り上げていくのか、そういう視点での議論が必要ではないかという、あえてこういう試算の数字をここでお見せした訳です。これはあくまで経済産業省がやっている地域経済研究会、その資料に事務局に今回協力を得ましてこの地域の数字を入れ込んだというものでございます。

さて以上で少し予定の時間をオーバーしましたがけれども、第1回ですので、現況の説明をしているとついつい長くなってしまうのですけれども、そこはご了承いただくということで。

このあと各委員のメンバーに、今現況を説明した中での地域の実状、今後についてということで、あまり資料についての質問をそれぞれいただくと、時間があれなものですから、ある意味で今後こういう作業をしていただきたいと、こういうところちょっとわからなかったと、次の機会にきっちりわかりやすい資料をだして欲しいと、少しそういう前向きなご指摘をいただくということで、是非最初の第1回の委員会でもございますので、それぞれの各委員が実践的に関わっておられる活動、関わっておられる分野の中で、この委員会にあった主旨に沿って必要な今後の目指すべき方向とか、こういうところが地域の課題ではないかということ幅広くご意見をいただければというふうに思います。

最終的にはこの委員会では、国土交通省釧路開発建設部の委員会ということで、社会資本整備、公共事業につながる社会資本整備というところの議論で、この議論である程度まとめていきたいと、今日第1回でございますので、そこはある意味でこれからの議論ということで、幅広く皆さん方普段感じておられることを、忌憚のないご意見をいただければと思っておりますのでよろしくお願いたします。

今日は各委員からご意見をいただきたいというふうに思います。このあと名簿順ということになってしまうのですけれども、浜中の石橋さんからよろしくお願いたします。

石橋委員 ご説明いただきましたものの中で、釧路管内の農業の実態としてある程度データとして示された訳ですけれども、特に人口減少という問題は私共の産業も避けて通れないというところにあるものでして、今日は資料持ってきていませんけれども、釧路、根室管内の農家人口、特に後継者を持っている農家の比率は極めて少ない比率になってきているということが一つあげられます。

ただ一方で投資額、年間今でも24、25億の、投資は依然として生産構造のいってみれば変化、大型化という方向性で進められているのも事実でありますから、釧路、根室管内の133万トンの生乳生産、今年からちょっと厳しい計画生産に入りますけれども、それはさておいて、基盤としてはこの133万トンがもう少し上乘せする方向に基盤としてはつくられていくということと思っております。

考えなければいけないこととしましては、いわゆる新規就農をたくさん呼び込むかと、全国にいる農業をやりたい、酪農をやりたいという人を如何に呼び込むかということが課題としてあると、大型化に伴いますその法人化といいますか、協業化、共同化といいますか、こういうかたちでの拡大化も一つの課題として、それらがきちんとできあがった時には、この釧路、根室管内の草地基盤これはこれからの農業生産の中では、私は一つの武器になりうると思います。

これは世界的な傾向にある訳ですけれども、いわゆる環境というものを重視し、農業生産というのは、世界的にこれからも重視されていく傾向にあると、そういう中であっては日本の中でも、この北海道、道東、道北というところは酪農生産という面においては、極めて環境的にいい環境におかれたところであるということが認識できると思います。

いい環境にあるということは酪農の生産環境というものと相俟って、観光資源としての部分も持ちうると、そういう部分もカウントしていただいて結構だと思っております。いずれにしても、今地域の農業が抱えている問題は後継者をどうきちんと確保していくかということで、それからどうしても後継者を確保できない場合、法人化なり、大型化なりの中で、生産維持をできるようなシステムをどうつくっていくかということが一つの問題としてあると思います。

ちょうど釧路港を、釧路管内から本州に牛乳が送られておりますけれども、今年の7月からさらに大型船が就航いたします。現在ホクレン丸の3割増の積載能力を持ったものを7月から2隻就航いたします。これまでの船は寿命がきたので、スクラップされますけれども、大型化するというはこの釧路、根室管内からの本州に向けての生乳輸送は、将来的には今は色々な制約があって持ち込めないというのを、将来的には本州の需要量をきちんと維持するために、もしくは本州の需要に応えるだけのものを運び込んでいくという、釧路、根室地方の、北海道の酪農の戦略として私共はつくっていかねばならないとい

うふうに思っております。

新ホクレン丸については一つの武器になりえると、武器にしなければならないというふうに思って、建造についても私の方からホクレン丸に進言してきた経緯がありますから、そういう方向性でいえば、人口が減るとということと、牛乳という乳製品を食べていくということの関連性をこれからしっかり検証していかなければならないと、この地域の農業が釧根という地域の農業は、酪農でしか生きられない地域ですから、それを将来生き残っていくためには、資料の中にもありましたが、唯一残る地域と力づけられる一文があったのですけれども、私は多分環境問題、消費者の安全・安心に対する意識の問題ということも含めていけば、日本で唯一残れる酪農地帯としてしっかりやっていかなければならないという思いをしております。そのことを申し上げたいと思います。

小磯委員長 はい。ありがとうございます。多分この委員会のまとめの中でもこの地域が持っている農業、酪農それのその可能性というものをどう今後つなげていくのか、課題に対してどういう方策を提起していけるのかと、新しい計画に対するこの地域からのメッセージとしても大事な部分ではないかと感じておりますので、そういう面でそれに向けての色々なご意見さらにもお願いしたいと思います。ちょっと大島委員申し訳ございません。宮田委員が途中で退席されるということで、どうぞお願いいたします。

宮田委員 ありがとうございます。すみません、ちょっと急に東京に行かなければならないもので。飛行機の関係で 16 時 30 分頃退席させていただければと思います。すみません。

この資料を見せていただいて、やはり先ほど話があったように、ちょうど小磯先生、近藤さんと道新ホールで地域のグラウンドデザインをつくらなくてはならないという中で、釧路、根室管内の色々なテーブルについてグラウンドデザインをつくらなくてはならないということで議論をずっとしております。

特に 33 ページの画を見ますと、ある意味では釧路が拠点というわけではないのですけれども、飛行場があってここから各地域に交通インフラとしての道路を、紋別から釧路までの高速道路ができると、そのあとを受けて、釧路から各観光地、今の物流だとかを含めた基本的な道路のインフラがどうなっているのかということは、道と暮らしネットワークフォーラムという地域のグループをつくっております。栗林さん、近藤さんと取り組んでいる訳ですが、これは地域の住民として訴えていかなければいけないことと、プラス石橋会長の方からお話あったように、地域の経済とインフラが結びついているいい時代だと思うのです。こういったものがあってこそ、物流を活用でき、経済的な活動の基盤を活用したビジネスがあると。

あとで近藤さんお話されるかもしれませんが、水産加工品、生鮮の食料品も含め、やはりここから札幌の市場にもっていくための高速基盤があるないでは違ってくると、やはりこういったものを地域でグラウンドデザインとして、釧路、根室管内を含めたエリアで考えていく必要があるというふうに思います。

それから観光客が飛行場に降りて、高速道路で新千歳空港から、千歳が先ほどの説明でもあったように、たくさんの方がチャーター便か何かで集まってくると、道東に来る時に、世界遺産を見に行く時について分断された道路であったりだとか、冬の山越えというのも

ありますし、整備が望まれる訳ですけれども、千歳から高速道路ができた後での道路、情報提供も含めたものも地域で必要になってくるのではないかとということで。

今、国土交通省がユビキタスというテーマで、総務省と国土交通省が取り組んでいると思いますけれども、海外からの旅行者に対する美味しいものだとか、個別旅行に対する情報提供をやはり釧路、根室で整えていけないだろうかと、特に台湾などの観光客、先週ビジネスマッチング協会の近藤会長のもとで台湾に行って来た訳ですけれども、たくさんの方が来られているとそういう中で、ツアーではなくて個別旅行に入ってくると、そういう対応を含めて、道東は個別旅行というのはホテルとかではなくて、もっと深いところで、先ほど農家の後継者不足の先ほどお話をしましたが、色々な意味で農家のステイをしたいだとか、あるいはもう少しアウトドアでこういうことをしたいだとか、個別的な用件がでてくるわけで、今は売り上げにはなっていないかもしれませんが、観光の裾野、サービス業が北海道の中でも釧路が低いということですので、サービス業をつくっていく上でも、基盤をつくってビジネスをつくっていくということが、必要ではないかとということで、私達は釧路ITクラスター推進協議会というものをつくっております、私会長を務めさせていただいているのですが、根室管内では別海、中標津というのは情報化が進んでいる地域なのです。

そういったところで持っているノウハウだとか、地域で協力して、何でもかんでも釧路でやるという訳ではなくて、地域でそういった情報インフラだとか、先進的なアイデアとかある中で、連携してユビキタスを利用したシステムを、例えば無線LANを活用するとか、そういったものをやろうではないかといった、管内で、管内の強みでそういったシステムの中で何かができるようなビジネス基盤ができてくるのが、次のステップに必要なと感じた訳です。ありがとうございました。

小磯委員長 はい、ありがとうございました。それでは大島先生お願いします。

大島委員 北見工大の大島です。小磯先生質問するなとおっしゃったのですが、簡単イエス、ノーで答えられるものですので、2、3大事なところですので、確認させていただきたいです。

15 ページの小磯先生が説明された自給率のところ、自給率が少ないとおっしゃられたのは、掲載に使った数字はトン、重さなのか、エネルギーベースなのか、価格ベースなのか。

小磯委員長 これは価格ベースです。平成10年の地域間産業連関表からです。

大島委員 21 ページの依存度のグラフなのですが、依存関係は何の、これは開発局に聞かなければならないのでしょうか。何の数値がこの依存関係とでているのでしょうか。物流なのですが、額なのかどうか。

事務局（釧路開建） 地域からでる、各市町村からでる貨物につきまして釧路港からトンベースで、重さです。

大島委員 30 ページで先ほど小磯先生が産業関連で、分析されたところの説明あったのですが、漁業の観光に対する連関というのは、調査結果に、船に乗って釣りをするとか、このような意味の連関になっているのですか。金額ベースですか。

小磯委員長 はい。金額ベースです。観光客が釧路、根室地域に滞在した時に消費する形態、食えること、ホテルに泊まること、お土産を買うこと、色々な形態、消費がありません。

その消費を全部調査しまして、それを各産業に分類をした訳です。直接水産業に関わるものであれば、生鮮の水産物、お土産を買うとか、あるいは旅館で生鮮物、地元の魚を食べるとか、直接漁業の消費になり、あと関連で経済波及があるものはそういうことです。

大島委員 わかりました。私の意見といいますか、第1回目なので感想なのですが、田村先生とかなり前段の方は重なるので省略しまして、田村先生のスタンスと同じようなものを持っておりますけれども、先を考えるべきだというふうに私自身は思っているわけです。

皆さま方どの程度現在の状況をご存知かわかりませんが、来月の14日にかけて、北海道を取り巻く道州制にからむ問題で大きく動いておるものですから、それとこれとがどのようにリンクするのか、まだ整理つかないと思いますが、議論がまずあると思います。

簡単に言いますと、釧路、根室地域が将来、2030年の推計ありますけれども、いずれにしても人口減少下で、どのようなペイラインといいますか、その地域構造、域内、域外を含めた全部推計すれば、ある程度どのような人口のはりつけで、どのようなペイラインになるかということは分かってくる訳ですから、人口が減少して特に自治体の方こうしてたくさん来られていると、マイナスの数字がくると、田村先生がおっしゃられるように選択と集中といいますか、どこにどれだけ人口を配置して、ネットワーク、インフラとしての道路のネットワーク、ITのネットワークを、コストのかからない地域構造というのをしていくか、全体的な人口の減少と共に経済、社会的な数字とどう、サージレートといいますか、落とし込んでいくのか、ターゲットを立てて、その上にたつてどういうふうにしななければならないのか、ターゲットを立てていけないことには、そういう観点で資料整理していくのがいいのではないかと。

今日は漠然としておりますが、また機会がありましたらもう少し具体的にお願ひしたいと思います。

小磯委員長 どうもありがとうございました。栗林さんお願いします。

栗林委員 あらためまして、三ツ輪運輸から参りました栗林と申します。会社が港に絡んでいるものですから、港に関わる物流について話したいと思ってしまう訳ですが、今日いただいた資料3の非常によく読ませていただきまして、特に後半の経済部分は得心できるものが多くて、楽しく読ませていただきました。

昨日札幌のほうに営業で参りまして、釧路の話になりました。お客さんがおっしゃられる話によりますと、釧路のイメージは魚だったりする訳でありますけれども、期待しているほどよくないとおっしゃいます。どういうことかといいますと、思ったより安くないと

力説されます。こちらとしては美味しいものをより美味しく出そうとしている訳ですが、今は本当に食べるものが色々研究されている中で、それなりに安いものでも美味しく食べられるようになってきました。北海道、特に釧根地域の美味しいものも、道内ではそれなりに体感できてしまうことを、お客様の話の中で痛感いたしました。

何を言いたいかと申しますと、今回は釧根地域をベースに如何に生きていくか、存在意義を高めていくか、そこにいる価値を高めていくかということであるということを考えてみると、やはりそれは対北海道ではなくて、对本州であり、対アジアであり、海外に釧根地域を売っていくことが、方向性としてあるべき姿なのだろうなということを考えております。

今道東地域のものを海外に売り出すのに一番簡単なことは、外貿（外国貿易）コンテナ船が三年前から就航しております。これが一番海外にものを出せる、飛行機は別にして、手っ取り早い方法なのかなと考えておりますが、これに関して結構国外の方から色々な要望を受けます。

私共としては如何にコンテナを早く荷役するか、あるいはどんなに遅く入港してきても荷役対応していくかということを追求していきますけれども、国外から求められるものももっと早く、もっと便数を増やし、その活きの良さを届けることができるようにするかということを要求されています。

今の環境ではまだまだ応えられていませんし、今回社会資本整備に関わってくるということで、また改めて国外から求められている部分が多いことを、お伝えできればと思っております。よろしく願いいたします。

小磯委員長 はい。ありがとうございました。それでは引き続き近藤さんお願いします。

近藤委員 釧路丸水の近藤と申します。域外からお金を稼いでくる水産食品の製造業をしておりますけれども、今資料のご説明をいただいて、先ほど宮田さんも地域のグラウンドデザインが必要だということでしたけれども、私もこの地域 20 年後、30 年後どうあるべきかということで、グラウンドデザインをしっかりとつくりなければいけないなというふうに感じています。

経営でいうところの、既に起こりつつある未来への対応、これよく言いますけれども、もう既に現実として人口が減少し、人が住まなくなるという地域があると見えている訳ですから、それに対して如何に地域としてグラウンドデザインをつくって対応していくかということが、僕はこの地域でやらなければならないと感じています。

水産食品の製造の現場でいいますと、先ほど石橋会長もおっしゃってありましたけれども、それを担っている漁業体の経営者が、非常に疲弊しています。高齢化あるいは後継者がいないということで、我々地域に根ざした活動、地域の水産原料を使い、水産食品をつくって、それを全国に出荷するといっていますけれども、その生産現場が耐え切れない位疲弊していると、これに対しては、どうしてもこの地域は対応していかなければならないのではないかと僕はそういうふう感じています。

もう一つ域外からお金を稼いできている訳ですが、この地域というのは非常に食料自給率が高い訳です。全国ベースでいきますと 40% 位しか食料自給率ありませんけれども、この地域に限っていえば食料自給率が 180% もあります。外に食料を出してお金を稼いできているということは、何らかの輸送手段を使って、ここから外に品物を出していかな

なければならない。そのための物流インフラがあまりにも貧弱で、大変な思いをしております。

例えば、サケ、マスに関していえば、東北海道が全国に占める割合というのは60%もあります。北海道全体ですと約80%のシェア、サンマですと東北海道が約45%のシェアを占めております。つまり新鮮な魚介類を全国に出荷することによって、日本の皆さんの食生活に貢献している地域な訳です。

どうしても物流インフラが必要ですが、この冬場日勝峠をどうしても越えなければいけないとか、あるいは西港の問題にしても、荷物を出そうと思っても、カントリークレーンさえも用意されていないような、非常に貧弱なインフラしかない。こういう状況をやはり改善していかないと、この地域は将来に渡って域外からお金を持ってくるということは、非常に難しいのではないかなというふうに感じています。

インフラ整備のことを今ちょっとお話ししましたが、それと海外の旅行者が非常に増えているという話をなさっていましたけれども、国際化への対応もインフラの整備は非常に重要だと思っていて、例えば海外の旅行者が北海道で自動車を運転しようと思っても、標識が読めないわけです。日本語で書いてあるから。例えば標識も英語、日本語、韓国語、中国語で標記するとか、そういう海外のお客さまに対する細かいところへのインフラの整備ということも、これからは十分考えていかなければならないでしょうし、市内における各種の案内も、やはり他国語表示して、国際化に対応していくということもこれからは必要になってくるのではないかなというふうに感じております。雑駁ですが以上でございます。

小磯委員長 はい。ありがとうございました。引き続きまして三膳さんお願いします。

三膳委員 NPO法人の霧多布湿原トラストです。何か場違いではないかなという思いでここにいる訳ですが、小磯先生の隣でいいのかなと思っていますけれども。

釧根地域将来像とすごい会議に出席してしまった訳ですが、皆さんのお話を聞きながら、先ほどの資料を説明していただいて、自分達は霧多布湿原という環境という切り口での地域づくりをやっているのですけれども、30ページのところでちょっとへえと思って聞いていたのですけれども、酪農と漁業と浜中町は分かれていますのですけれども、酪農の方は石橋組合長さんがいるので、どんどん温度が高くなっているのですけれども、漁業の方がちょっと温度は低いのです、浜中町は。

先ほどの観光がどれだけ自分達に波及効果というのが、漁業の方は本当に低いなど、自分達の活動をしながら、感じているところなのです。地域づくり、湿原を守っていきながら、環境を重点的にやっているのですけれども、観光であり、地域づくりなのです。

団体の観光客を誘致する、次には個人がまたゆっくり来てくれるというような人口が減ってどんどん人がいなくなる浜中町はどうなのだろうと思いつつながら、自分達で今生活しているものが観光客の人に、喜んでいただけるというところが、まだまだ生産者としては分かっていないところなのです。そういうところを自分達は開拓しながら、エコツーリズムというところを重点的に今活動しています。

お金につながれば一番興味がわくというか、目を向けてくれると感じているところなのですけれども、人口が減って行って人がいなくなったら、どうしようと大きく感じている

ところですけども、第1回目に参加したのですけれども、こんなことでいいのでしょうか。自分達の活動がそういうところに向いていっているということで。

小磯委員長 はい。ありがとうございました。またあとでお気づきの点ございましたら、ご意見ください。辻中さんお願いします。

辻中委員 羅臼の辻中です。観光協会の会長を去年からさせていただいていますけれども、まだほやほやであります。ほやほやのうちに世界遺産の登録というようなことで、夏はそれに振り回されて、過ぎてしまったなということでもあります。

皆さん新聞でご承知のように、世界遺産の後の人の入りというのは、やはりウトロを中心に非常に多かったです。一極集中というかたちで羅臼はそういう点では増えには増えましたが、それほどではないと。

今年大体総入り込みで6%位のプラスということで、ただ宿泊の方は16%位の伸びになっているということで。私今この資料を見せていただきながら、まさにそうだと思ったのですが、観光ルートの設定、29ページです。これをみながら、去年東京方面にエージェントに挨拶に行ったのですが、まさにこれに表れているとおりでありまして、釧路に入ってきて阿寒、弟子屈、川湯、ウトロ、網走というような流れになっていて、根室管内になかなか入ってこない、そういうルートがなかなかないということなのです。

考えてみましたら、根室管内なんかは大きなところはあまりありません。そういうようなこともありますので、これは仕方ないと思うのです。この釧路では、これから観光を盛んにしていくというところで、タイプが完全に二つに分かれてしまっているし、これからも分かれていくのかなというようなこと、しばらくの間というようなことを思っています。

マストツアーで動く人を収容できる大きなところ、エコツアーへ重点をおいていくところと、それぞれの地域、まちがやはり自分達の一番向いているところ、得意なところを集中して観光をすすめていく必要があるだろうというふうに思います。

私は12月にオーストラリアの方へエコツアーの勉強に行ってきました。車で泊まったホテルから、1時間半位から2時間位かかって目的地へ行って、エコをやっているところへ行って研修して、また戻ってこれ位の時間がかかるということなのです。

それを考えますと、この道東でそれでは2時間圏内というかどうかというふうなことになるのかなと言いますと、どうなるのかということを考えました。やはりインフラ、道路の整備というのは大切だと、それでなければ釧路に泊まったお客さん、釧路を拠点にしているお客さんが、この知床の羅臼までオオワシを見るとか、それから雪の中を歩いて、また釧路へ戻ってくるというようなツアーはできないというふうに思う訳です。

そういうようなことで、先ほどお話もありましたけれども、釧路から根室や知床の方へのルート、道路というものの定時性、高速性をしっかりお願いしたいものだと思うのです。釧路、阿寒、川湯に泊まった、1日で行って知床のエコに参加して戻ろうというようなことができてる。

そうすると何故地元で泊まってくれなくなるなという心配があるのですが、地元でなければ見られないというところをエコで作りだしていくのだというようなことが、地域でなされなければならないと。

私は地域でエコツアーを進めていく時に、ガイドなんかの人達がここはいいですよと推薦してやっているのは分かるのです。情報をどんどん提供していく、自分達のまず、まちの人に知ってもら。皆さんの市や町でどうでしょうか、観光で来られた方にどこかいいところありますかと聞かれた時に、いや何もありませんと、ここはないというのが大半ではないでしょうか。

そういう時に羅臼に来た時はこの展望台から見ていってください、今だったら朝の6時位ですか、朝日が昇る時流氷があったりして素晴らしいですよ、スケソウダラの漁船が出てきます、是非そういうのを見てくださいますかと、それからそういうことがまち中でできる。

その次に観光協会の根室管内の会長と話をしているのですが、例えば羅臼へ来たお客さんに、次にどこを見たらいいのですかと聞かれた時に、標津のサーモンパークへ必ず行って見てくださいますと、野付行ってくださいますと、とどわら行ってくださいますと、開陽台行ってください、あそこいいですよと言ってきっちり案内できること。

私、九州に行ってびっくりしました。ルートを変更してしまった位です。あまりうまく薦められて。行ったら大したことがなかったのですが。本当にすごいのです、連携が。私は今こそ、これだけ観光の資源があるといわれていて、まだまだ磨かれない、色々なことありますけれども、まず地域の中でお互いに絞り込んで、うちの町のこういういいところを隣のまちに宣伝してもらいたいとか、連携の力をきっちり蓄えていく時だろうというふうに思います。

小磯委員長 はい。ありがとうございました。次に出村先生お願いします。

出村委員 北海道大学の出村です。農業経済、環境経済が専門なもので、今までのお話の中にも、農業と環境がでてきました。昨日も農水省の政策研究所で会議がありまして、いわゆる農業の多面的機能ということを最近言われます。

農業というのは食糧生産という最も基本的なこと、経済活動をしているけれども、それ以外に色々な外部効果という機能を発揮していると、いってみれば国土保全機能だとか、アメニティー機能、その代表的なのが、農業をやることによって、周りの自然環境、景観を美しくつくと、代表的なのがスイスですけれども、そういうものが十分に観光資源になっていると。北海道でいえば美瑛、富良野がなっているというのは、これは農業が衰退すると多面的機能も衰退すると、ですから農業をしっかり保護すると。これはまさに日本の議論であって、EUやOECDではWTOなんかで交渉していますけれどもいってみれば通用しないんです。府県、東京でそういう話をすると、農業の多面的機能はプラスの機能として言うのですけれども、基本的には農業というのは公害産業だと。

私は北海道にいますと、畑作、酪農というのを念頭に置きますから、環境汚染ということがでてくるのです。農業の環境問題、直接支払いといった時に、農業の出す環境に対する負荷をどう抑えていったらいいのかというかたちですと、日本は今言った農業は多面的機能を発揮するから、農業生産をしっかりと、これは水田農業というのがベースにあるので、府県では今そういう話をするので、北海道で農業といった場合、特に根釧でいった場合、やはり酪農が中心になると畑作、それから北見、十勝という北海道でも二大畑作地があって、酪農地帯があるという、そこでこれからやはり畑作、酪農という地域の基幹産業である農業を、推奨していかなければならないという、特に汚染問題を何とかして

いかなければならないという、一方今会長さんが言ったように、道東には観光資源がたくさんあるのです。

従来のようなマストツーリズムの他に、エコツーリズムというようにお話でましたけれども、グリーンツーリズム、エコツーリズムだとか、マスから小さい規模になってそういうツーリズムというのは多分もっと活発になっていくという、そうなるといわゆる農業の汚染問題と、観光振興というものをどういうふうに調和させていくのかと、そういう仕組みというのでしょうか、そういうことが必要だと思います。

一番農業、酪農の場合の汚染でいえば家畜ふん尿汚染で、既に家畜のふん尿等の排せつ物の規制で、そういうものに対する尿溜めだとか、施設投資をして、汚染をださないということ、もし出せばペナルティで罰金がかかりますということで、既に進んでいます。

ところがふん尿関係に関する投資というのは、ここにいらっしゃる農業関係の方には、釈迦に説法ですけれども、所得を生まない過重な投資となっていると。従って農業由来の汚染問題を解決し、なおかつ観光ということとどういうふうに調和しているかということで、その辺をこれから将来像を考える場合に、派手な投資なりそういうものではないのですけれども、非常に重要だと思うのです。

先日も弟子屈に行って来ましたが、摩周湖に随分観光客が来ています。あそこも知床の世界遺産登録のあおりではないですけれども、随分向こうからはじかれて、旅行者が随分向こうにも来ています。

別な委員会で行ったのですけれども、あそこでもかなり大型の酪農経営がされています。その時にある酪農家のところに行ったのですけれども、日本を、北海道を代表する摩周湖という近くで、100頭の牛を飼っているのだと、つまり環境に配慮した、見てもらっても恥ずかしくないような、大型酪農経営をやっているのだと、自負というのでしょうか、大変感激したのです。

この根拠で大型酪農経営をやるといった時に、環境問題をどういうふうに処理していくのかという、非常に重要なことで、春先にホーツク等一般の観光客も随分訪れると思うのですけれども、従来と同じようなふん尿処理をしていると大きなマイナスですし、かといって農家に負担といったかたちで押し付けるというのも厳しいことですし、酪農による水汚染、土壌汚染というのは、単に酪農だけではなくて、漁業資源そういうものにも影響しますし、農業問題と観光問題をそういう面から、ここではどう調和していくのかなという大きなことだと思います。

我々の研究室で研究課題として何年か研究しているのですけれども、例えば牛 100 頭飼っているというのはどういうことかと、牛は1日に 60 キロ出すのです。これは人間に換算しますと、少なく見積もっても、20 人分から 30 人分なのです。100 頭ということは、1,000 人の工場があるということなのです。

我々これをふん尿換算人口とよんでいるのですけれども、1,000 人規模の工場がもし建ったら、その周りにはし尿施設だとかができて管理すると。しかしそれは農家でやっていますし、農家もファミリーファームでやるには、牛 100 頭のふん尿を親子 2 人、3 人でやるというのは、とても大変なことなのです。

やはり法人化だとかでやらなければならないし、この地域で大型化すればコントラクタというかたちで、他の運送業者だとかそういう業界が別のかたちでビジネスチャンスということで、仕事が必要になってきますから、地域における業者間の協力というのでしょ

か、そういうあたらしいビジネスチャンスもやりようによっては、私はあると思いますし、座長の先生からも先ほどでたように、ここは北海道の中でも製造業が盛んだということで、これはやはり具体的には食品産業だと思うのです。

食品産業にしても、北見、十勝だとか、このあたりだとか随分地元の農産物があるけれども、地元の人が地元のを原材料として、消費するにしてもなかなか使えなかったと。北海道は基本的には自給率 100%達成していると、外にだせるということですから、結局ロットが大きいということがあって、なかなか地元になんかまわらない、美味しい食材があっても、地元の人がそれを利用できない。これは北海道のどこに行ってもそういう話を聞きます。

今、スローフードだとか、地産地消だとか、そういう言葉が随分ありますけれども、やはり観光客に、地元の人に、地元の美味しい食材を食べてもらって、それが観光の基本なので、そういうベースというのでしょうか、資源はここにいっぱいあると思うのです。そういうものをどういうふうに組み合わせしていくのかというのが、重要だと思います。

私の専門領域や、何かからいっても、今までずっとお話を聞いて、何かコメントできることがあるし、勉強になるかなと思っています。それから最後に一つですけれども、人口が減るとするのは、これはもう当たり前で、今までと同じで人口が減れば困りますけれども、あまり人口が減る減るということを大変だと、言う必要がないと思うのです。

あり方を変えれば、極端なことを言えば、今まで 50坪にしか住めなかったけれども、100坪の住宅に住めるようになってという、人口というのは確かに活動力の大きな基盤ですけれども減るとするのは事実ですから。

それとこれは極めて卑近な例ですけれども、釧路に来るとするのは我々やはりここで海産物だとか、非常に楽しみにして来るのですけれども、釧路は高いです。かつて漁業のまちとして栄えたせいなのかもしれませんが、居酒屋行っても、スナックに行ってもとにかく高いのです。

ここに来て、漁業のまちとして美味しいものを食べられるという良さは、私釧路に何回か来ているのですけれどもないんです。むしろ札幌、東京の方が、札幌に釧路という居酒屋が2軒、3軒あるのですけれども、そこはそれなりに安くて、美味しいのです。釧路に来るなら、札幌の釧路に行った方がいいのではという位で。

小磯委員長 はい。ありがとうございました。お待たせいたしました。行木先生お願いいたします。

行木委員 出村先生の後段のお話は一つは人口減のその過大に評価、マイナスとして受けとめなくてもいいのではないかと、それにはほっとしたのですが、釧路はやたら高いというふうにおっしゃられまして、釧路のものは東京で食べた方がいいというようなことをいわれますとちょっとがっかりするという、浮き沈みのはげしいお話をいただきました。

私は弟子屈町で一まち医者をやって十数年、以前には厚岸町に 15 年間お世話になっておりました。道東約 30 年間ということになって、出身は横浜です。余談ですが 1 分位で切り上げますが、横浜には横浜市歌がありまして、高校を卒業するまでいたものですから、折りあるごとにその歌を歌うのですが、厚岸に住み、釧路を眺めて、道東の海岸を見ていて、横浜市歌のイメージがいつもくるのです。

横浜市歌というのは、今の横浜はこうであるという、昔を思うと苫屋、藁葺き屋根からの煙がちりほらりとたっていて、魚の焼く匂いが匂っていたようなまちであると、それから開港 100 年、今世界に開いた港として、あらゆる宝物が出入りしているのだということを書いてるのが横浜市歌なのですけれども。

厚岸の港を眺めると、何百年か前の横浜はきっとこうであったのではないかなと思うし、釧路港を眺めると何百年かまでいかなければ、何十年か前は横浜もきっとこんなのではなかったかなと思うというのがいつもあって、その発展途上とか、そういうイメージがいつもどこかででてくると。

人口の問題でいきますと、ご承知のとおり医療の領域でいきますと、医者がいないということがテーマになって騒がれているわけです。医者に限らず、医療の技術屋さんがいない訳です。地域としては人口は全体的に緩やかに減っていると、人口が少ない過疎地、医療でいえば医療過疎地なのですが、それをもっと平たく言ってしまうえば人材の過疎地ではないかと、人がいないのは数人がいないのではなくて、あるレベルの人がいなくなっているということで、怒らないでください、僕も道東の人間ですから。こういういたらくで 21 世紀迎えてまだこのような状況になっているのだと、言ってもいいくらいのような現状ということの方が片方にもあると思うのです。

先ほどエコツーリズムだとか、農業のお話で石橋組合長さんからありましたけれども、田村教授からもお話ありましたように、もしかしたら日本で唯一こういう質を持った地域に人々が暮らしているという、この辺にしかないのじゃないかという、なんとなく目の前に見えてきたような気がするのです。

私は先ほど申し上げたようなちょっとマイナスイメージがあって、厚岸に住んでいる時に何とか一町民として、このまちにお役に立ちたいというのがありましたものですから、町民の皆さんに呼びかけて、厚岸を考える会というのをつくって、雑誌をだしたり、色々な催し物をやってみたり、ありとあらゆることを自分なりにやりました。厚岸を急にやめることになったのですけれども、やめる時には貯金が何もなくて、弟子屈に来て開業ということになったのですが、まるまる借金をしたのです。

銀行の人が厚岸町立病院に何十年もやっていて、給料いくら分かっている訳ですから、これしか貯金がないのはどういう訳と、これこれこういうふうに使ってしまつてと、すっからかんでしてと、これも余談で申し訳ないのですが、というような経過で、今お蔭様で生活保護を受けないでやっているのですけれども、昔のイメージで言うと、田舎で先が非常に見えない、人口が減っていくと、基幹産業は厚岸でみれば漁業ですが、200 カイリ、その前には 50 カイリがあったのですけれども、どんどん減っていく訳です。

そういうのを見ていると、どうなったらいいのだろうか、そういう意味でまちおこしというのを、自然に考えるようになると。ちょうど釧路支庁が音頭をとって、15 夜談義とっていました、管内 15 市町村の人を集めまして、場所を変えて色々な議論を交わす集いがあったのです。私も参加させていただいて、ずっと関わらせていただいたのですけれども、年齢でいうと、私がある時既に一番高齢者になってしまっていました。

宮田さんもこのような流れの中でよく一緒に議論させていただいた記憶があるのですが、その頃の記憶としては経済学で、確か大阪市立大学の教授で、確か宮本先生という方がいらっしゃったのですが、まちおこしは地獄絵を見なさいと、このように人が減っていく、まちが減っていく、商店が減っていくと、最終的に地獄のように食うや食わずのこんなよ

うになってしまうという、そこまで見てごらんなさいという、そこまで見たらそれではたまらないという踏ん張って、四の五の余計なことを言わないで、まちをつくり上げていこうという勇気が湧いてくるし、プランがでてくると、地獄図を描きなさいということが彼の主張の中にありました。

これから同じようにして、どうしたらいいのか考える時には先進地を見なさいと、同じような条件の中で、いつているじゃないか、素晴らしいなという地域が、日本といわず世界を広くみれば必ずあると、そこをモデルにしながら、何故あそこはあんなふうに、蘇っているのかというのを、考えてごらんなさいというのを読んでそれを原点にしながら、20年位前の話だったのですけれども。

その当時感心したのは、虻田町の町長さんだったと思うのですが、住めば都という言葉があると、自分が住んでいるまちのいいところを選べばといいと、住めば都というけれどもそうではないと。都にして住もうという。自分の住んでいるところを都だと、ここは快適だと、こういうふうにして住んでいこうということを、町長さんだったかが文章を書かれていて、これもすごいなと感心させていただいたのですけれども。

それから現在のようなことになってきまして、今お話いただいたように、農業が環境に対してはむしろ環境を壊していく、環境の基礎条件、土壌だとか、水系だとか、かなり悪影響を与えているというようなことも含めて、農業を考えないとよくないと。

宮本教授も昔は地獄絵の話をしていましたけれども、今は環境経済学の話で、昔は経済が環境を規定していたと、今は環境が経済を規定するというような条件設定で、地域のことを考えていこうとするように思うのですけれども、そんなふうになっているのではないかと。

しかし石橋組合長さんおっしゃられたように、農業の現場から、環境を配慮した産業、基幹産業を考え、基幹産業の中に人々を呼び寄せるもの、観光資源としての農業そのあり方、そこから生産される流通を通じたということがきっとあるのかもしれませんが、本当に素晴らしいのではないかとということで、長くなりますのではしよりますが、述べさせていただきますと、道東、全国的に国立公園がいくつかあるうちの3つ、北海道のうちの3つがここにあると、この圏内にです。そのような場所は全国唯一だと思っております。

やはり知床も国際級の世界遺産としてのレベルを持ってこうなった訳ですから、釧路湿原、伝統的な温泉、山と湖という阿寒の国立公園という、ある意味で言えばこの人口は減っていくかもしれないけれども、国立公園全体が一体とした地域であるということに寄与した観光、そこに根付けるような産業をつくっていく以外に、長期的にはないのではないかとということで、予感としてはでてまいります。

先ほど近藤さんおっしゃられた、国際性ということで、ある意味では言葉の問題が非常に大きい訳で、道路標識の話がありましたけれども、学校教育なんかでも、例えば簡単なロシア語、韓国語、中国語だとかというのを、挨拶、道案内に使えたりというような言葉体験を、教育段階で体験というか、ロシア語もそうだと思いますが、できるような工夫があっただけではないかと思っております。こんなふうに思っております。

本業の方から言いますとはずれますけれども、医療というのはある意味では十手取り縄、火消しですとか、昔で言えばまちの人が住む空間、基幹をなす、寺子屋とか医者がいるとか、そういう部分に属する、そういうレベルから考えてみますと、最低限人が住んでいく上での、その地域に住んでいく上での、地域に依存する、地域の良さにしがみついて、這

い上がっていくということをしないと、なかなか住みぬけないなというようなことを、つくづく感じます、

最後に申し上げたいのは、医療とか、今介護の時代ですけれども、あまり産業としては評価されないと思います。私さっき申し上げましたように、すっからかんで弟子屈に行って、銀行にあなたの年齢だとこれしか貸せないと言われてスタートしました。単なるまち医者です。

平成5年で、職員は6人です。現在職員31名おります。借金は相変わらずしているのですけれども、12、3年で6倍になったと、6倍になった雇用の増加を見てそのような職種が釧根地域でどの位あるのと、小磯先生にうかがいたいのですけれども、かなり産業で言えば成長だと思います。お給料なんかも調べてもらいたいのですが、最大限私の給料は毎年減るのですが、職員が少なくてもこの地域で暮らせるようなお給料は出したいと、財布をふって工夫しながらやっているのですけれども、それだから僕は医療とか、介護は立派な産業、しかも生活密着型ですし、暮らしに直結しています。いいと思うのにこの4月から改定される労働省の案とかも決まりましたがそういう意欲をなくすのです。ますます苦しくなるばかりで、30人の職員を20人に減らさなければとやっていけないかもしれないという状況なのです。

需要があるのです、高齢化率が上がるのですから。それを供給しようとする、医療は金がかかって困るからと、国の方から首をしめてくると、十何年かかって、雇用に6倍に伸ばした努力を誰が評価してくれているのというような意味で、絶望的になっているというのも、私の現在の姿です。以上です。

小磯委員長 はい。ありがとうございました。これで各委員からのご意見、一巡したのですが、さすがの論客揃いということで、本当はもう一巡位しようかと思ったのですが、時間的余裕がないという、これだけは是非この機会に言っておきたいとご意見ございましたら。よろしいでしょうか。はい、石橋さん。

石橋委員 出村先生から厳しいご指摘があったのですが、ただ国の誘導策として、これはふん尿処理の問題がありましたけれども、法律ができてきちんとやらなくてはいけないということで当たり前のことになりました。

私はかつて5年位前に、札幌で観光業者の皆さんと会議がありまして、エージェントの皆さんが言われましたのは、9月、10月は道東には行きたくない、中標津空港、釧路空港に降りて、バスに乗った途端に、バスの中に異様な空気が、臭いが入ってくるということなのですが、そのことについては、国の政策そのものが国の処理3法ができて、処理をなささいということとあわせて、今年度から発足します新しい仕組みの中で、そういう臭いを出さないような処理の仕方、奨励施策、インセンティブな施策が出てきたのです。

これは私共はやる、やらないではなくて、地域産業の中で、地域の皆さんと一緒にやっていく産業として、これは避けて通れない課題、河川汚濁の問題もありましたのですが、これも当たり前の話で。ですからこういうものをきちんとやり、地域の中で産業として、自立できるものをつくっていくのは、今私共に課せられた課題だというふうに受け止めておりますし、それはやっていかなければ、将来的に酪農が残っていけない問題だと受け止めて、今努力している最中でございます。その点一つご理解いただきたいということで。

小磯委員長 はい。ありがとうございました。今日は第1回ということで。手短にお願
いします。

辻中委員 エコツーリズムを進めていくということになりますと、エコツーリズムは地
域の総合力だというふうに思っています。景色がいいだけではだめなので、そこに住んで
いる人、仕事をしている人、それから産業文化を全部含めて、そのまちの力を見てもら
うのが、エコツーリズムというふうなことを思っておりまして、エコツアーは地域の総合力
というようなことを考えます。

インフラ整備の関係で、皆さんからお話ありましたが、環境保護、保全そして景観を絶
対はずしてはいけないというふうに思います。特に釧路、根室というのは自然との共生と、
共生する場だということですので、明るくなるのではないかなというふう
なことを思っております。以上です。

小磯委員長 はい。ありがとうございました。辻中さんにまとめていただいたような感
じで、大変感謝しておりますけれども。今日は第1回ということで、各委員から持ってお
られる問題意識、この地域に対する今後についての期待、そのご自身のお考えをざっくば
らんにお聞きするという場だったと思います。

私からも一つ最後にお話をさせていただきたいと思うのですが、新しいこれからの時代
の地域のビジョン、長期計画というものを考えていく上で、いくつかのキーワードがある
ように思うのです。

一つは1990年代後半からつくられて、今長期計画ができて新しいコンセプトが、環境問
題がでてきた、特に持続可能な開発という、Sustainable Development というような言葉で
はないかなと。

この言葉色々なところで語られているのですが、言葉が先行していて、実際に地
域の中で展開していくという、やはり営み、取り組みというのはこれからの大きな課題に
なっていると。例えばこの釧路地域において、持続可能な、これはどういうことかと言
いますと、皆さん方の子供、孫の世代に自分達と同じような豊かな生活を引き継いでいく
という、そのために今どういう地域づくりをすればいいのかという、具体的に農業であれ、
観光であれ、製造業であれ、そのための基盤整備はどうあるかということが求められて
いる、これが一つだと思います。

もう一つが人口減少、さっき私の説明誤解があったかもわからないのですが、人口減少
というこの趨勢を、厳しいかそうでもないかという受け止めなど各人それぞれですが、た
だどういう姿になるかということが多面的に掘り下げて考えていかなければならないとい
うことを、一つのデータということで、先ほどお見せした訳です。

地域の実状なり、受け止めるべき課題は違うと思います。人口減少という少なくとも経
験したことのないような時代における持続可能な開発の新しい地域のモデル、そういうも
のが、この地域の中でどういう分野で、どういう取り組みの中で展開していけるのか、そ
のためどういうテーマがあるのかということで、今日各委員皆さんからいくつかご提示が
あったように私は思います。

それは農業、観光、環境であれ、あるいは外に向かって国際化時代に新しい産業展開を

していくという、それぞれの取り組みというのがやはり色々なかたちで連携し、そうすることによって地域の持続可能な開発というものを目指した一つのモデルになりうる、新しい先駆的なものになっていくのではないかと、そんなご意見だったのではないかなというふうに受け止めました。

その具体策、それはなかなか難しい課題だというふうに思います。そんな方向で限られた検討委員会の会議ではありますけれども、一つでも二つでも、具体的なものを出せるようなかたちで、進めていければなと、今日の会議を終わりたいと思います。

ただ、議題でその他というものがございまして、事務局の方で、この機会にご審議いただきたいとかありましたらお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

事務局（釧路開建） 資料4のところに第2回と第3回の間に、住民等の意見聴取と言うのがいうのがありますが、意見の聴取の仕方等について、次回ある程度決めていただきたいということがありまして、今のところ事務局で考えている案がございますので若干ご説明させていただきます。

事務局（未来総研） それでは住民意向アンケートについて、口頭でご説明させていただきます。今回のアンケートにつきましては計画段階ということもありますので、主な目的は地域の皆さまに対する情報提供と、全体の方向性に向けた意向の把握整理が中心になってくるというふうに考えております。

このように捉えますと、やはりまずこの委員会の目的であるとか、活動であるとか、この地域の現状であるとか、将来予測について、地域住民の皆さまに、例えばホームページなり、郵送アンケートなりというかたちで、情報提供させていただくのとともに、地域ニーズであるとか、地域がこうあるべきであるとか、地域住民の皆さまがどういらっしゃるのか、住民ニーズの把握であるとか、それから今後あるべきこの地域の姿だとか、こういったものの意向アンケートを通して把握したいと思っております。

手法といたしましては、ホームページへの掲出であるとか、ウェブのアンケート回答の他、地域住民を対象とした郵送アンケート、メーリングリスト、地域のキーパーソンへのインタビュー、地域住民を代表した方へのインタビューを検討しておりますが、詳細につきましてはあらためて次回ご説明、ご報告させていただきます。

小磯委員長 はい。どうもご説明ありがとうございました。この点は委員の皆さま方から色々な分野について課題提起もございましたので、それをふまえてあらためて検討された上でということで、もし委員の方からもアンケートのやり方について何かありましたら、あとで事務局の方にお寄せいただくということで。それでは事務局の方にお返しいたします。

事務局（釧路開建） 長時間ありがとうございました。それでは若干今後のスケジュール関係についてご説明させていただきます。

事務局（釧路開建） 今後のスケジュール關しまして、ご説明させていただきます。資料の4の方ご覧いただきたいと思います。

表の右側に括弧書きで、北海道開発分科会というものがございまして、これは国土交通省

の国土審議会がございまして、北海道開発分科会における新しい北海道の開発審議会となっております。

この審議策定スケジュールにあわせまして、本委員会も開催しまして、この地域の情報を発信していきたいと思っております。本日第1回目の委員会を開催いたしました。第2回目は4月に、今回委員の皆さま方からいただきました意見等に基づいた資料作成をいたしまして、目指すべき将来像検討委員会を開催したいと思っております。

その後、只今お話のありました住民等への意見聴取を行いまして、6月に第3回目を、社会資本整備のあり方を議題に開催したいと思っております。それで9月に第4回目を開催いたしまして、とりまとめを行う予定でございます。

つきましては、第2回目を4月に予定しておりますが、今後また早々にでも、委員の皆さま方に日程調整をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。委員会の開催スケジュールにつきましては簡単ではございますが、以上でございます。

最後に本日の委員会の議事録につきましては、釧路開発建設部のホームページの方に掲載、公表させていただきます。つきましては後日委員の皆さま方にお送りさせていただきます。ご確認後掲載させていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。以上でございます。

事務局（釧路開建） 本日予定をしておりました議事が全て終わりましたので、これをもちまして、第1回釧路地域将来像検討委員会を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。

<第1回釧路地域将来像検討委員会終了>